

児童期のアタッチメント対象の把握 —Function Based アプローチによる検討—¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 村上 達也

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 櫻井 茂男

Attachment figures in middle childhood: An investigation from a functional-based approach

Tatsuya Murakami (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Shigeo Sakurai (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to identify attachment figures in middle childhood. To that aim, an Attachment Figure Nominated Scale for Children (AFNSC) was created and examined in terms of its validity. The respondents were 728 fourth-, fifth-, and sixth-grade elementary school students (375 boys and 353 girls). In examining the validity of the scale, a coincidence rate was calculated between individuals identified as an attachment figure in the AFNSC and individuals identified within the first circle of convoy mapping. A high coincidence rate was obtained, which indicates that the scale has a certain degree of validity. The AFNSC revealed that the mother, who has traditionally been regarded as the most significant attachment figure, was nominated by only 64% children as their first attachment figure, and also that fathers, friends, and grandparents can be attachment figures.

Key words: attachment, attachment figure, middle childhood.

問題と目的

Bowlby の提唱したアタッチメント理論 (1969/1982, 1973, 1980) に関して、これまで発達心理学および社会心理学の領域で数多くの研究が行われてきた。発達心理学の領域では、主に乳幼児を対象とした研究が行われ、社会心理学の領域では、青年・成人を対象とした研究が行われてきた。しかし、乳幼児期、青年期、成人期のアタッチメント研究と比べて、児童期のアタッチメントに関しては、ほとんど研究がされてこなかった (Solomon &

George, 1999)。例えば Kerns & Richardson (2005) では、児童期のアタッチメント研究が少ないことが指摘され、その研究の必要性が説かれている。アタッチメント理論は生涯発達の理論であり、乳幼児期の知見と青年期・成人期の知見を繋げる意味で児童期のアタッチメント研究は重要であると考えられる。

児童期のアタッチメントを研究するにあたって、まず、児童期のアタッチメント対象は誰であるのか、ということが問題になる。なぜなら、アタッチメントとは、「個体がある危機的状況に接し、あるいは、そうした危機を予知し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体への近接を通して、主観的な安全の感覚を回復・維持しようとする傾性 (Bowlby, 1969/1982)」、あるいは「ある人と特定の他者との間の愛情の絆 (Ainsworth & Bell, 1970)」

1) 本研究は、2009年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆、修正したものである。

とされ、誰との間のアタッチメントなのか、が定義上の大きな問題になるためである。また、アタッチメント研究の中で多くの興味、関心を引いてきた内的作業モデルという概念の中でも同様の問題が存在する。内的作業モデルとは、アタッチメントの質、すなわち個人差を説明するために導入された概念であり、その後の発達、適応を予測する大きな要因と考えられている。内的作業モデルは「自分にとってアタッチメント対象は誰であるのか、そのアタッチメント対象からどのような応答が期待できるのか、という主観的な考え (Bowlby, 1973)」であり、ここでも自分にとってアタッチメント対象が誰であるのか、が問題になる。これらのようにアタッチメント対象が誰であるのかというのはアタッチメント研究の中で重要な意味を持つ。

さて、一般にアタッチメントは人との間に築く情緒的絆 (Bowlby, 1988) であり、また、ゆり籠から墓場までの生涯発達理論であるとされる。このような定義から先行研究においてアタッチメントは、親子関係のみならず、恋愛関係、夫婦関係、友人関係といった緊密な関係性一般を指すものとして捉えられてきた。そのため、乳幼児期を扱った発達心理学領域の研究では、母親を中心に、父、祖母、保育者などのアタッチメント対象が研究の対象とされ、青年期を扱った社会心理学領域では、恋人、友人、家族、一般他者などのアタッチメント対象が研究の対象とされてきた。

その中間にあたる児童期はアタッチメント対象の移行期であると考えられている (近藤, 2001)。つまり、父母が中心となる関係性から友達などの関係性への移行期であると考えられている。そのような考えの下、数少ない児童期のアタッチメント研究では、アタッチメント対象を誰と考えるべきかという問題に対して、発達心理学的研究と社会心理学的研究の2つの研究の立場が混在している。例えば、Finnegan, Hodges & Perry (1996) では母親を、Booth-LaForce, Rubin, Rose-Krasnor & Burgess (2005) では父親と母親の両方をアタッチメント対象として研究を行った。一方、Nada-Raja, McGee & Stanton (1992) や Ridenour, Greenberg & Cook (2006) は、両親と友人をアタッチメント対象と想定し、研究を行った。

以上のような研究において、アタッチメント対象は、研究者によってあらかじめ想定された関係性カテゴリを基に検討されてきたと理解できる。こうしたアプローチの仕方を Category Based アプローチ (以下、CB アプローチと略記する) と呼ぶこととする。すなわち、乳幼児研究では、主に母親とい

う関係性カテゴリをアタッチメント対象とする研究を、青年・成人研究では、友人、恋人という関係性カテゴリをアタッチメント対象と想定する研究を行ってきたと捉えることができる。

これらのCBアプローチによる研究に対して2つの批判がある。第1点は特定の関係性カテゴリが必然的にアタッチメント対象といえるのかという点である。CBアプローチは、上述したように、研究者が想定した特定の関係性カテゴリに属する人すべてをアタッチメント対象と考える。しかし、Takahashi (2005) はこの点を「多くの人にとって母親は重要であっても、すべての人にとってそうだというわけではない」と批判している。これはすなわち、ある関係性カテゴリに属する人が必ずしもアタッチメント対象ではない、ということを示唆しているであろう。また Schaffer (1977) は、Bowlby (1969/1982) の母親あるいは養育に関わる人がアタッチメント対象である、という定義に対し、重要なのは関係性カテゴリではなく、果たすべき役割機能であることを論じている。これらから、研究者が想定した特定の関係性カテゴリに属する人物が、ある個人にとって必ずしもアタッチメント対象ではないと考えられるにも関わらず、アタッチメント対象であると操作的に定義して良いのかという問題が指摘できる。

第2点は、親密さとアタッチメントを混同している点である。CBアプローチでは親密な関係性をアタッチメント関係であると仮定してきた。しかし、関係性とアタッチメントは同義ではなく、アタッチメントは最も親密な人間関係の特別な側面のみを問題にしている (Waters, Corcoran & Anafarta, 2005)。また、アタッチメント概念に親密な愛情関係に関わる様々な特質を分け隔てなく含めて考えてしまうことに対し、アタッチメント概念の特異的な有効性が失われてしまうのではないか (Goldberg, 2000) という他の概念との弁別性についての議論も存在する。研究者が想定した特定の関係性カテゴリに属する人物は、ある個人にとって親密な関係性にあるかもしれないが、それは必然的にアタッチメント関係にあることを意味するとは限らない。したがって、他の親密な関係性とアタッチメントを区別するための基準が必要となる。

以上から、CBアプローチの問題点として、①必ずしも問題にしているその対象がアタッチメント対象であるとは限らないこと、②アタッチメント対象の基準が不明確なこと、そのため、③アタッチメント対象をデジタルに (アタッチメント対象である、そうでない) 捉えることが難しいことの3点が挙げ

られる。

CBアプローチの問題は、アタッチメント対象の基準が曖昧であることと、アタッチメントの定義において情緒的絆という多義的で曖昧な定義を採用していることに起因する。Hazan & Zeifman (1994) は、アタッチメントを絆という比喩的な定義を用いるのではなく、Bowlby (1969/1982) における「有害となるような危険を減少させ、あるいは過去に不安をもたらしたものを特定の人との近接によって和らげ、そして安全であるという感覚を増大させる生得的な行動システム」という行動システムとしての定義を採用した。さらにBowlby (1988) で定義されているアタッチメント行動システムを構成する4つの機能要素である、近接性の維持、安全な隠れ家、分離苦悩、安全基地を取り上げ、アタッチメント機能が誰に向けられているのかという観点から、これらの機能を満たす人物をアタッチメント対象とした。つまり、どの関係性がアタッチメント対象なのか、という関係性カテゴリに基づいてアタッチメント対象を定義するのではなく、ある人物がどの程度アタッチメントの機能を果たしているのかに着目し、アタッチメント対象を定義している。このようなアプローチをFunction Basedアプローチ（以下、FBアプローチと略記する）と呼ぶこととする。この知見に基づき、本研究ではアタッチメント対象を、アタッチメントの4機能が向けられている人物と定義する。本研究ではHazan & Zeifman (1994) およびAinsworth (1991) を参考に各機能を以下のように定義した。まず、近接性の維持機能とは密接な関係を探し、維持しようとする傾向であると定義された。次に、安全な隠れ家機能とは、知覚上、あるいは現実の危機に直面した際、安心や安らぎを求めに行く傾向であると定義された。また、分離苦悩とは、対象との分離に抵抗し、苦悩する傾向であると定義された。最後に、安全基地とは、対象がそばにいることによって、安全を確保し、大胆になる傾向であると定義された。この4つの機能をアタッチメント機能とする。

FBアプローチのメリットとして、①アタッチメント機能の程度の大小で捉えるため、明確な基準がいない（Aはよりアタッチメント機能を果たしている対象であり、Bはあまり果たしていない対象である、など）、②Bowlbyのアタッチメントは不安低減システムである、という考えをより反映できる、③研究者側で特定の関係性カテゴリを想定しなくとも、アタッチメント機能を果たしている人物は誰かを尋ねることで、広くアタッチメント対象を検討できる、という3点が挙げられる。また、FBアプロー

チの視点でこれまでの研究を捉えても矛盾は起きない。すなわち、CBアプローチでは、母親が第1アタッチメント対象とされてきたが、FBアプローチにおいても、母親に対してアタッチメントの機能が向けられやすく、そのため、第1アタッチメント対象である可能性が高いのではないかと、CBアプローチの知見を統合的に考えることができる。

さらに本研究では、アタッチメント対象を1人と捉えるのではなく、複数のアタッチメント対象を同時に検討する。アタッチメント研究はこれまで、母子関係を中心に、二者関係の研究に取り組んできた(Lewis & Takahashi, 2005)。しかし、人間が複数の関係性の中に生きていることは明らかであり、また近年 van IJzendoorn, Sagi & Lambermon (1992), Howes, Hamilton & Philipsen (1998) などに代表されるように、人間は複数のアタッチメント対象を持っていると考えられている。そのため、それら複数のアタッチメント対象を同時に扱う必要があるといえる。さらに、児童期において、子どもは対人関係を拡大させていくため、母親、父親に限定されないアタッチメント対象を検討する必要がある。特に青年期では、友人や恋人がアタッチメント対象として研究されていることから、どのように母親や父親から移行していくのか、すなわち、アタッチメントの機能がどの対象に向かっているかを捉える上でも、FBアプローチによるアタッチメント対象の把握は重要になると考える。

以上のことから、本研究では、FBアプローチによる児童用アタッチメント対象指名尺度を作成し、その妥当性を検討すること、および、その尺度を用いて児童の複数のアタッチメント対象を明らかにすることを目的とする。尺度の妥当性については、第一に、作成された項目の内容的妥当性を検討する。第二に、基準関連妥当性の検討として、コンボイとの一致率を用いる。コンボイ・モデル (Kahn & Antonucci, 1980) は社会的ネットワークを、本人を中心とする3つの同心円構造で表したものである。それぞれの円は、異なる親密性のレベルを表す。第1の円に所属する人は、親密性のレベルが最も高く、これらの人との関係は、役割要求を超えたものであり、生涯を通じて比較的安定しており、さまざまなタイプのサポートが交換される。このコンボイ・モデルにおける第1円に書かれた人々の心理機能は、アタッチメント対象に等しい (Levitt, 2005) とされる。したがって、コンボイ・マッピング法 (Antonucci, 1986) における第1円に記入された対象とアタッチメント指名尺度で記入された対象の一致率を見ることによって、基準関連妥当性の検討を

行う。妥当性の予測は以下の2つである。① Levitt (2005) より、コンボイ第1円に挙げられた対象はアタッチメント対象に等しいと考えられているため、児童用アタッチメント指名尺度によって挙げられた人物とコンボイの第1円において挙げられた人物の一致率は高いと予測される。②アタッチメント対象の順位は、ある個人にとって、その対象にアタッチメント機能をどの程度向けているかを反映しているため、アタッチメントの順位が高いほど、コンボイとの一致率は相対的に高まり、アタッチメントの順位が低いほど、コンボイとの一致率は相対的に低くなると予測される。

なお、コンボイの測定は通常、面接法によって行われるが、本研究では質問紙法を用いた。高橋(1999)では、実施の仕方や教示によって、記入される人数が変動することが指摘されている。そのため、質問紙法としてのコンボイ・マッピング法の妥当性の検討も行った。井上・高橋(1999)では、ソーシャル・ネットワークはその大きさが重要なのではなく、どのようなサポートを受けているかという内容が重要であることが示された。そのため、ソーシャル・ネットワークの大きさは、自尊心や精神的健康とは、小さな相関しかみられないことが予測される。

方 法

調査対象者 東京都内の公立小学校5校(区内3校、市内2校)の小学生766名に対して調査を行った。有効回答数は728であった。有効回答数の内訳は、4年生219名(男子110名、女子109名)、5年生261名(男子134名、女子127名)、6年生248名(男子131名、女子117名)であった。なお、このうち小学5年生78名は、下記の児童用アタッチメント対象指名尺度にのみ回答した。

調査時期 調査は2009年2月から3月に実施された。

調査内容

1) **アタッチメント対象の測定** Hazan & Zeifman (1994)、および Kobak, Rosenthal & Serwik (2005) を参考に、児童用アタッチメント対象指名尺度を作成した。この尺度はアタッチメントの4機能、すなわち、「近接性の維持」、「安全な隠れ家」、「分離苦悩」、「安全基地」の4つの機能について、誰を利用しているか、順に4人尋ねる指名法尺度であった。対象者に「とても大切だと思う人4人を順に思い浮かべて下さい。また、その人たちとの関係を書いてください。4人思いつかないときは、思いつくだけかまいません」と教示し、さらに、具体的な人物

を思い起こさせるために、(姓を省略した)下の名前の記入を求めた。続いて、「あなたにとって身近な人は誰ですか(近接性の維持)」、「とてもつらくて、泣いてしまいそうな時、誰のところに話をきいてもらいに行きますか(安全な隠れ家)」、「長い間あえなくなると、あなたがさみしくなる人は誰ですか(分離苦悩)」、「新しいことに挑戦するとき、励ましてくれる人は誰ですか(安全基地)」について、先に挙げてもらった4人の中で、最も利用する人から順に指名させた。

2) **ソーシャル・ネットワークの大きさの測定** ソーシャル・ネットワークの大きさと、それを構成している人物との関係性カテゴリ(母、父、祖父母、友達、兄弟姉妹など)を測定するために、児童用コンボイ・マッピング法(Levitt, Guacci-Franco & Levitt, 1993)を用いた。これは当人を支える人々をConvoy(護衛艦)に見立て、数人から成るソーシャル・ネットワークを重要さの程度から3段階に分けて聞く方法である。つまり、3重の同心円を使って調査対象から、ソーシャル・ネットワークを聞き出す測定方法である。Antonucci, Akiyama & Takahashi (2004)において、児童用コンボイ・マッピング法は日本人児童サンプルにも適応されており、同じ教示文を用いた。第1の円には一番身近で大切な人、第2の円には第1の円の人ほど身近ではないが大切な人、第3の円には他の円ほどではないが大切な人を記入させた。

3) **児童用精神的健康尺度** 児童用精神的健康パターン診断検査(西田・橋本・徳永, 2003)の30項目を用いた。これは児童の精神的健康をポジティブな側面とネガティブな側面から測定するための尺度である。1(全然そんなことはない)〜4(すごくそうだ)の4件法で回答を求めた。分析では、ポジティブな側面として「生活の満足感」、「目標・挑戦」、「自信」の3下位尺度、ネガティブな側面として「怒り感情」、「疲労」、「引きこもり」の3下位尺度について、下位尺度毎に項目の平均評定値を算出し尺度得点とした。 α 係数は、生活の満足感では.94、目標・挑戦では.81、自信では.84、怒り感情では.87、疲労では.86、引きこもりでは.88であった。また、西田他(2003)に従い、ポジティブな側面の平均値をやる気次元得点、ネガティブな側面の平均値をストレス次元得点とした。 α 係数は、やる気次元では.66、ストレス次元では.64であった。やる気次元、ストレス次元の下位尺度に関しては、 α 係数がやや低いものの、児童用精神的健康尺度について、一定の内的整合性が確認された。

4) **児童用コンピテンス尺度の下位尺度「自己価**

値」 櫻井（1992）の児童用コンピテンス尺度の下位尺度「自己価値」10項目を用いた。1（全然そんなことはない）—4（すごくそうだ）の4件法で回答を求めた。分析では全項目の平均評定値を算出し、尺度得点とした。 α 係数は.78であった。

手続きと倫理的配慮 調査は各学級担任に依頼し、学級ごとに集団で実施した。質問紙のフェイスシートに「回答の秘密は守られること」、「成績にはまったく関係ないこと」、「答えたくない場合には、回答を中止してよいこと」を明記し、それらを読み上げた後、無記名で回答を求めた。回答時間は25分から30分であった。

結果と考察

1. 質問紙によるコンボイ・マッピング法の妥当性

コンボイの第1円に記入された平均人数（標準偏差）は5.54（2.45）、第2円は4.26（2.68）、第3円は2.33（2.23）、コンボイ全体では12.13（4.79）であった。その内訳はTable 1に示した。Levitt et al.（1993）およびAntonucci et al.（2004）で示された人数よりも多い人数が得られたものの、家族などが第1円に、友人などが第2円に、それ以外が第3円に記入されるというコンボイの構成パターンには大きな変動はないことから、一定の妥当性があることが確認された。

次に、各円に記入された平均人数と児童用精神的健康尺度の各下位尺度および自己価値との相関係数をTable 2に示した。各円に記入された人数と「自

己価値」、および精神的健康のポジティブな側面である「生活の満足感」、「目標・挑戦」、「自信」、「やる気次元」とは弱い正の相関が無相関が、精神的健康のネガティブな側面である「怒り感情」、「疲労」、「引きこもり」、「ストレス次元」とは弱い負の相関が無相関がみられた。ここから、井上・高橋（1999）で示されたのと同様に、ソーシャル・ネットワーク・サイズ（記入された人数）は精神的健康とは相関関係にあるものの、相関係数が小さいことが確認された。

2. アタッチメント機能の分析

各アタッチメント機能の順位を得点化（1位に4点、2位に3点、3位に2点、4位に1点を与えた）し、4つの機能すべてに対して回答されている対象をアタッチメント対象とした。4つの機能における合計得点をアタッチメント対象得点とし、得点が高いものから順に第1対象、第2対象、第3対象、第4対象とした。同得点のものに関しては、大切な人の順位を参照し、大切な人の回答において、高い順位に挙げられた対象をアタッチメント対象として上位においた。アタッチメント対象における関係性カテゴリとその割合はTable 3に示した。

3. 児童用アタッチメント対象指名尺度の妥当性の検討

児童用アタッチメント対象指名尺度の妥当性を検討した。第一に、心理学を専攻する大学院生4人と小学校の教師1名によって、項目が定義を反映しているか、項目の難易度が適切であるか、について検討され、内容的妥当性が確認された。

Table 1 コンボイに記入された人物の関係性属性の出現度数と割合

関係性	第1円		第2円		第3円	
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
母親	623	95.6	18	2.8	5	0.8
父親	549	84.2	50	7.7	12	1.8
祖母	336	51.5	138	21.2	30	4.6
祖父	281	43.1	116	17.8	24	3.7
兄	152	23.3	24	3.7	5	0.8
姉	134	20.6	18	2.8	4	0.6
弟	131	20.1	20	3.1	5	0.8
妹	134	20.6	14	2.1	1	0.2
叔父・叔母	59	9.0	64	9.8	31	4.8
いとこ	147	22.5	160	24.5	56	8.6
友達	359	55.1	595	91.3	404	62.0
先生	27	4.1	125	19.2	142	21.8
その他	11	1.7	28	4.3	100	15.3
ペット	55	8.4	21	3.2	17	2.6

Note. *n* = 652.

Table 2 ソーシャル・ネットワークの人数と心理的適応の相関係数

		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
CONVOY	1 CONVOY 全体	.56**	.73**	.65**	.17**	.19**	.14**	.17**	-.11**	-.08	-.13**	.22**	-.13**
	2 第1の円	-	.06	.02	.16**	.18**	.11**	.11**	-.09*	-.14**	-.16**	.18**	-.16**
	3 第2の円		-	.30**	.07	.10*	.05	.10*	-.06	-.01	-.05	.11**	-.05
	4 第3の円			-	.10**	.08*	.11**	.13**	-.06	.00	-.03	.13**	-.04
心理的 適応	5 自己価値				-	.38**	.36**	.72**	-.27**	-.26**	-.23**	.62**	-.34**
	6 生活の満足感					-	.41**	.34**	-.28**	-.32**	-.42**	.79**	-.43**
	7 目標・挑戦						-	.44**	-.08	-.08*	-.11**	.79**	-.11**
	8 自信							-	-.22**	-.20**	-.16**	.74**	-.25**
	9 怒り感情								-	.44**	.31**	-.25**	.78**
	10 疲労									-	.37**	-.27**	.82**
	11 引きこもり										-	-.31**	.67**
	12 やる気次元											-	-.36**
	13 ストレス次元												-

^{a)} ** $p < .01$, * $p < .05$

^{b)} $n = 640$.

Table 3 アタッチメント対象として挙げられた関係性の出現度数とその割合

アタッチメント対象	First Person		Second Person		Third Person		Fourth Person	
	Count	%	Count	%	Count	%	Count	%
母親	467	64.1	103	14.1	24	3.3	13	1.8
父親	66	9.1	259	35.6	124	17.0	58	8.0
兄弟姉妹	33	4.5	95	13.0	186	25.5	154	21.2
祖父	4	0.5	9	1.2	19	2.6	41	5.6
祖母	5	0.7	26	3.6	52	7.1	42	5.8
いとこ	3	0.4	2	0.3	13	1.8	38	5.2
叔父・叔母	2	0.3	1	0.1	3	0.4	5	0.7
友だち	88	12.1	150	20.6	197	27.1	204	28.0
先生	3	0.4	8	1.1	2	0.3	4	0.5
ペット	0	0	2	0.3	10	1.4	13	1.8
その他	0	0	3	0.4	2	0.3	6	0.8
無回答	57	7.8	70	9.6	96	13.2	150	20.6
合計	728	100	728	100	728	100	728	100

Table 4 Convoy model における第1円に挙げられた対象と児童用アタッチメント指名尺度において挙げられた対象の一致率

	n	First Person	Second Person	Third Person	Fourth Person	Q 検定量	多重比較
		一致率	一致率	一致率	一致率		
Attachment 機能							
近接性の維持	628	94.6%	90.9%	81.1%	68.0%	230.06**	1 > 2 > 3 > 4
安全な隠れ家	607	92.8%	84.2%	78.3%	73.0%	105.74**	1 > 2 > 3, 4
分離苦悩	624	93.1%	90.5%	80.1%	69.2%	186.01**	1, 2 > 3 > 4
安全基地	626	91.1%	87.2%	80.4%	74.4%	84.90**	1, 2 > 3 > 4
Attachment ※	598	95.8%	87.1%	77.8%	67.3%	214.86**	1 > 2 > 3 > 4

** $p < .01$

※ アタッチメントの4機能を満たしていることを条件とし、4機能における順位を得点化したものを合計して得点の高いものから順に、First Person, Second Person, Third Person, Fourth Person とした。

第二に、コンボイ第1円に記入された人物と児童用アタッチメント対象指名尺度で挙げられた人物の関係性との一致率により、基準関連妥当性を確認した(Table 4)。第1対象の一致率の範囲は95.8%—91.1%の間、第2対象の一致率の範囲は90.9%—84.2%の間、第3対象の一致率の範囲は81.1%—78.3%の間、第4対象の一致率の範囲は73.0%—67.3%の間と高い一致率を示した。また第1対象、第2対象、第3対象、第4対象の一致率をCochranのQ検定で比較した。Ryan法による多重比較の結果、第1対象が最もコンボイ・モデルとの一致率が高く、第2対象が次いで一致率が高く、続いて、第3対象、第4対象と、児童用アタッチメント対象指名尺度で挙げられた順位がコンボイ・モデルとの一致率にそのまま反映されており、構造的な妥当性が示された。

しかし、第3対象では一致率は80%程度であり、第4対象では一致率は70%程度であった。また、安全な隠れ家において、第1対象と第2対象の間に有意な差が、さらに第1対象、第2対象と第3対象と第4対象の間に有意な差がみられ、第3対象と第4対象の間には有意な差がみられなかった。さらに、分離苦悩・安全基地において、第1対象、第2対象と第3対象、第4対象の間に有意な差がみられた。このことから、第1対象、第2対象と第3対象、第4対象の間には、質的な差が存在する可能性が示された。

4. 児童のアタッチメント対象の検討

児童のアタッチメント対象は、従来重点的に検討されてきた、母親、父親、友達を中心に検討すると、アタッチメント第1対象としての母親の出現率は64.1%、父親は9.1%、友人は12.1%、その他6.9%、無回答が7.8%であった。アタッチメント第2対象としての母親の出現率は14.1%、父親は35.6%、友人は20.6%、その他20.1%、無回答9.6%であった。アタッチメント第3対象としての母親の出現率は3.3%、父親は17.0%、友人は27.1%、その他39.4%、無回答13.2%であった。アタッチメント第4対象としての母親の出現率は3.3%、父親は8.0%、友人は28.0%、その他41.6%、無回答20.6%であった。本研究では探索的にアタッチメント対象を把握したため、これまで検討されてこなかった、いとこや叔父、おば、祖父などもアタッチメント対象になりうることを示された。

これまでの日本のアタッチメント研究は、母親に焦点をあてて行われてきたが、本研究の結果から、Takahashi (2005) の「多くの人にとって母親は重要であっても、すべての人にとってそうだというわけではない」という主張が実証的に支持される結果

が得られた。すなわち、第1アタッチメント対象として最も多くの人が母親を挙げているが、その割合は64%程度に留まり、それ以外の人々は、母親以外を主要なアタッチメント対象としていることが明らかになった。特に、日本では軽視されてきた父親のアタッチメント対象としての重要性、これまでの研究ではアタッチメント対象として考えられることの少なかった友達のアタッチメント対象としての重要性が確認された。Kobak et al. (2005) では、児童では第1アタッチメント対象、第2アタッチメント対象に友達が挙げられなかったと報告しているが、本研究では12.1%の児童がすでに友達を第1アタッチメント対象として捉えていることが明らかになった。これは、児童期において、アタッチメント対象の移行が始まっているとしたHazan & Zeifman (1994) の結果を支持する結果であった。

また、ある特定の関係性カテゴリが必ずアタッチメント対象であるというわけではなく、同じ関係性カテゴリ内でも、ある個人にとっては、その関係性の人物はアタッチメント対象であるが、ある個人にとっては、その関係性の人物はアタッチメント対象ではないということが示された。したがって、理論的想定によって、ある関係性を一括りにアタッチメント対象であると想定すると、実際のアタッチメント対象とズレが生じるのではないかと考えられ、CBアプローチでアタッチメント対象を捉える問題が実証的に確認された。

本研究の限界、問題点として、第一に、各アタッチメント機能に関して1項目のみで、どの対象を利用するか尋ねたことが挙げられる。より正確にアタッチメント対象を把握するためには、多項目による多面的な場面での検討が必要になるであろう。

第二に、各対象間にどの程度のアタッチメント機能を果たしている差が存在するのか、を検討することができなかった。すなわち、順序指名尺度はわずかな差にも鋭敏に反応するために、その差の大きさについては、その尺度の性質上、検討することができなかった。今後は、各対象間にどの程度の差が存在するのか、数量的に把握することが必要であろう。

第三に、重大な問題として、コンボイに記入された人物は、倫理上の問題により個人が特定できなかった(名前を記入させることができなかった)ため、一致率を算出しているが、その個人がコンボイに記入され、かつアタッチメント対象として挙げられているかどうかについては、完全には同定できなかった。そのため、算出した一致率に関しては、一定の留保をおいた上で、解釈する必要がある。本研究の結果から、児童用アタッチメント対象指名尺度

に関して、一定の妥当性が確保されたと考えられるが、今後、妥当性に関しては、さらなる検討が必要になるであろう。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S. & Bell, S.M. (1970). Attachment, exploration and separation: Illustrated by the behaviour of one-year-olds in a strange situation. *Child Development*, **41**, 49-67.
- Ainsworth, M.D.S. (1991). Attachment and other affectional bonds across the life cycle. In C.M. Parkes, J. Stevenson-Hinde & P. Marris (Eds.), *Attachment across the life cycle*. London: Routledge. pp.33-51.
- Antonucci, T.C. (1986). Hierarchical mapping technique. *Generations*, **10**, 10-12.
- Antonucci, T.C., Akiyama, H. & Takahashi, K. (2004). Attachment and close relationships across the life span. *Attachment and Human Development*, **6**, 353-370.
- Booth-LaForce, C., Rubin, K.H., Rose-Krasnor, L. & Burgess, K.B. (2005). Attachment and friendship predictors of psychosocial functioning in middle childhood and the mediating roles of social support and self-worth. In K. A. Kerns & R. A. Richardson (Eds.), *Attachment in Middle Childhood*. New York: Guilford Press. pp.161-188.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and Loss, Vol.1. Attachment, Second Edition*. London: Pimlico.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol.2. Separation: Anxiety and anger*. London: The Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis.
- Bowlby, J. (1979). *The Making and Breaking of Affectional Bonds*. Hove: Brunner-Routledge.
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss, Vol.3. Loss: Sadness and depression*. London: The Hogarth Press and the Institute of Psycho-Analysis.
- Bowlby, J. (1988). *A Secure Base: clinical applications of attachment theory*. London: Routledge.
- Finnegan, R.A., Hodges, E.V.E. & Perry, D.G. (1996). Preoccupied and avoidant coping during middle childhood. *Child Development*, **67**, 1318-1328.
- Goldberg, S. (2000). *Attachment and Development*. London: Arnold.
- Hazan, C. & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Bartholomew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships, Vol.5. Attachment processes in adulthood*. London: Kingsley. pp.151-178.
- Howes, C., Hamilton, C.E., & Philipsen, L.C. (1998). Stability and continuity of child-caregiver and child-peer relationships. *Child Development*, **69**, 418-426.
- 井上まり子・高橋恵子 (1999). ソーシャル・ネットワークの大きさと適応—ネットワークの人数は大学生活での適応と関連するか— 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 684.
- Kahn, R.L. & Antonucci, T.C. (1980). Convoys over the life course: attachment, roles, and social support. In P.B. Baltes, & O.G. Brim (Eds.), *Life span development and behavior, Vol.3*. San Diego CA: Academic Press. pp.253-286.
- Kern, A.K. & Richardson, R.A. (2005). *Attachment in Middle Childhood*. New York: Guilford Press.
- Kobak, R., Rosenthal, N., & Serwik, A. (2005). The attachment hierarchy in middle childhood: conceptual and methodological issues. In A.K. Kerns & R.A. Richardson (Eds.), *Attachment in Middle Childhood*. New York: Guilford Press. pp.71-88.
- 近藤清美 (2001). きずなの発達 米谷淳・米澤好史 (編) 行動科学への招待—現代心理学のアプローチ— 福村出版 pp.92-105.
- Levitt, M.J. (2005). Social Relations in childhood and adolescence: The convoy model perspective. *Human Development*, **48**, 28-47.
- Levitt, M.J., Guacci-Franco, N. & Levitt, J.L. (1993). Convoys of social support in childhood and early adolescence: Structure and function. *Developmental Psychology*, **29**, 811-818.
- Lewis, M. & Takahashi, K. (2005). Beyond the dyad: Conceptualization of social networks. *Human Development*, **48**, 5-7.
- Nada-Raja, S., McGee, R. & Stanton, W.R. (1992). Perceived attachment to parents and peers and psychological well-being in adolescence. *Journal of Youth and Adolescence*, **21**, 471-485.
- 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄 (2003). 児童用精神的健康パターン診断検査の作成とその妥当性の検討 健康科学, **25**, 55-65.
- Ridenour, T.A., Greenberg, M.T. & Cook, E.T. (2006). Structure and validity of people in my life: A self-report measure of attachment in the late childhood. *Journal of Youth and Adolescence*, **35**,

- 1037-1053.
- 櫻井茂男 (1992). 小学校高学年における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85-94.
- Schaffer, H.R. (1977) *Mothering: The Developing Child*. Boston: Harvard University Press.
- Solomon, J. & George, C. (1999). The place of disorganization in attachment theory: Linking classic observations with contemporary findings. In J. Solomon & C. George (Eds.), *Attachment disorganization*. New York: Guilford Press.
- 高橋恵子 (1999). 発達研究の現在 児童心理学の進歩, **38**, 1-28.
- Takahashi, K. (2005). Toward a life span theory of close relationships: The affective Relationships model. *Human Development*, **48**, 48-66.
- van IJzendoorn, M.H., Sagi, A. & Lambermon, M.W. E. (1992). The multiple caretaker paradox: data from Holland and Israel. In R.C. Pianta (Ed.), *Beyond the parent: the role of other adults in children's lives. New directions for child development*, **57**. San Francisco, CA: Jossey-Bass. pp. 5-24.
- Waters, E., Corcoran, D. & Anafarta, M. (2005). Attachment, other relationships, and the theory that all good things go together. *Human Development*, **48**, 80-84.
- (受稿 3 月 23 日 : 受理 4 月 30 日)